

HANAYAMA TIME



Shall
We
Dance?

「なる」と一緒なら何だってできる

上田麗奈

ハナヤマタ インタビュー

”自分じゃないから、
何でもできる“って
思っていた。

容姿も頭も美術や体育、なん
だってフツウの14歳——『ハナ
ヤマタ』の主人公「関谷なる」

はそんなフツウの生活から連れ
出してくれる”出会い“を夢
見ていた。そしてなるを演じる
上田麗奈さんも、また”出会
い“により役者として、声優
としての道を歩みはじめたと
いう——その出会いの原点とは
なんだったのだろうか？

「小さいころはとにかく活発で
物怖じしない子どもだったんで
す。着ているのも地味なTシャ
ツとジーンズという男の子のよ

うな格好をしていたんですけれ
ど、小学校6年生の時のクラス
メイトに、とってもかわいらし
い女の子がいたんです。みん
なから『○○ちゃん、かわい
い！』って言われながら生き生
きしていて、それがまた嫌み
じゃなくて。

その子にあこがれて、私もフ
リフリでかわいらしいスカート
やワンピースを着てみたい！
って思いました。そこからです
ね、女の子っぽくなろう！と
決めたのは。でも、そもそも

思ったからってなれるものじゃ
ないですよ（笑）。

そんな女の子っぽくなろうと
思ったところに、クラブ活動で演
劇部に入ったんです。入った理
由はお芝居をやってみたくとか
いう理由ではなくて、単にクラ
ブの先生が面白かったからなん
ですけれど。

でも、その先生がすごい熱心
——いや、どちらかといえば熱
血かな（笑）——に教えてくれ
て、お芝居っておもしろいなあ

……って。結局、中学高校と6
年間を演劇部でがんばりました。

特に高校時代は部員も予算も
少なかったですけど、演劇コン
クールでは県大会まで進んだり
して充実していました。その大
会の審査員の先生から『舞台
セットも衣装も脚本もチーフだ
けど芝居は素晴らしい』と
言っていただけなのは、芝居で
魅せてやる！と意気込んで参
加した大会だっただけに、うれ
しかったですね。





そうやって6年間も演劇をつづけたのは、やっぱり演じることが楽しかったからだと思っています。きつかけが楽しくて、続けてみたらもっと楽しかった。もともと自分から積極的に話しかけたり発表したりするタイプではなかったんです。ここはなるとちょっと似ているかな。でも、今でもはつきり覚えているんですが、はじめて全校生徒の前に立つて演じたとき、自分が言葉を大声で発していることそのものが面白かったし楽しかったんです。そのときは”自分じゃないから何でもできる”って思っていました。違う自分になれるというのが楽しかったんですね」

声優という道の岐路

演劇で違う自分になれる楽しさを知ったと語る上田さん。では、女優ではなく声優としての道を選択したのはなぜなのだろう？ 理由を聞くと彼女は、ちよつと照れくさそうにこう語ってくれた。

「演劇部を引退した高校3年の夏に、進路について考える授業

でいろいろと調べていたら、偶然81プロデュースのオーディションを知ったんです。

それまでは漠然と美術大学へ進学しようかと考えていたんですが、私がとてもあこがれていた女の子が常々『私は女優じゃなくて声優になりたいんだ』と言っていたのを思い出して。

私、その子をものすごくリスペクトしていたので、声優こそ目指す道だ！ って。影響されやすいんですよ、私、えへへ。

それで応募しようとしたら、オーディションの締切がなんと2日後（！）だったので、あわてて音楽の先生に、「録音機材と収録用の防音室を貸してください！」ってお願いに行きました。いま思えば、かなり無理なお願いですよね。しかも、選択科目で普段は音楽ではなく美術をとっていたので、その音楽の先生の授業を一度も受けたことはなかったんです……ほぼ初対面で。そんな私のわがままにも笑顔でこたえてくださった本当にやさしい先生に、とてもとても感謝しています。

結果、最終オーディションに進み、準グランプリをいただくことができたのですが、授賞式の会場に来ていた母が泣いて



偶然のきっかけを必然に変える力——上田麗奈という役者の源泉は、もしかしたらそこにあるのかもしれない。それは、『ハナヤマタ』のオーディションを受けた時のエピソードからも垣間見える。

今、とても ワクワクしています

いたという話を父から聞いて、準グランプリをいただけたことよりそちらのほうが驚きました……というのも、私の母は人前では決して涙を見せない人なんです。そんな母が人前で泣いてくれたと知って、私は本当に頑張らなきゃいけない、と。その母の話を聞いて、初めて受賞の重みと自覚を持てた気がします」

「最初のオーディションではなると真智を演じたのですが、その後に行われた再オーディションでは監督から『なるでお願いします』と言われました。最初のオーディションでは真智のほうがしっくりするかも？なんて感じていたんですが、資料をいただいて改めて練習をしていくと、なるの心の動きや想いに共感というか、”あ、わかる！”って瞬間が多くなってきたんです。

ですからオーディションの時は、なるを演じるというよりも自然に、普通に話していたような気がします。素に近いところで演じられたのは、きつとなると私が似ている部分が多かったからなのかもしれませんね、ふふふ。

なるは自分自身を前面に出すのはあまり得意ではありませんが、実は私も得意ではないんですよ（苦笑）。それではないかなとは思いますがアフレコに臨むのですが、やはり毎回悩みます。自分自身をさらけ出すにしても、相手が違えば出し方が変わりますし、そのタイミング、抱えている想いでも変わってきますから。

だから、なるが相手の心の揺らぎをどうとらえているのか、そしてなる自身がどう想っているのかを、回を重ねてもっと深く知りたい。

実際にマイクの前に立って会話をしていくと、当初の自分の想像とは違ったものになることのほうが多いんですね。でも、そのときの会話のほうになるっぱいいし、しっくりくる……いつも発見ばかりです。



関谷なる (CV. 上田麗奈)

容姿も頭も、何だってツツウの中学2年生。物語に出てくるようなヒロインに憧れながらも普通の毎日を抜け出す勇氣を持てないでいたが、月夜に踊る異国の少女ハナとの出会いをきっかけに、「自分も輝きたい」とよさこいの世界へと踏み出す。

PROFILE

上田 麗奈(うえだ れいな)

1月17日生まれ。

81プロデュース所属。

主な出演作は

『てさぐれ!部活もの』(園田萌舞子)

『アルモニ』(真境名樹里) ほか。

はじめは「楽しい」からスタートした上田さんの芝居は、いま新たなキャラクターと一緒に演じる仲間や先輩との出会いにより、楽しいだけではない何かに変化しているようだ。なるがハナと出会い、物語が動きはじめたように、上田麗奈という声優の物語は、今まさに大きく動きだそうとしている。その物語の主人公である上田さんは、どういう物語を描こうとしているのだろうか。

「自分がこの先、10年20年たっても、いろいろな人の話をちゃんと聞いて経験をして、そしてそれらを表現できる力を持ちたいんです。感受性が豊か……なんて言ったらちよつと月並みですけれど。」

収録現場で一緒にさせていただく先輩方は、皆さん自分は役者だと自信をもって言える方々ばかりなので、私もはやく心の底から『自分は役者です』って言えるようになりたいです。

お芝居で“違った自分”になれる喜びを知りましたが、その“違った自分”もやっぱり自分なんですよね。自分が知っていること、経験したことしかできない……だから、自分は役者だと胸を張って言えるようになるためにも、もっとたくさんの人たちと出会って話を聞いていきたいし、経験を積みたい。

なると出会い彼女を演じることで、自分は何かを得るでしょう。

うし変わるんじゃないかと感じています。それがどういうことなのかは、まだわかりませんけれど……。でも、今とてもワクワクしています、私」



Photo / Masaaki Matsumoto
Text / Yohei Ogawa
Editor / Koji Terada
Design / Over Drive

© 浜弓場 双・芳文社/ハナヤマタ製作委員会

TVアニメ「ハナヤマタ」7月よりテレビ東京ほかにて放送開始